搖籃の丘

永代美知代

『ねえ芳ちやんや、此絲織のお羽織はよそゆきなんだから、そのつもりで大切にお着なさいよ、其代りてちらの伊勢崎銘仙の方はねえ、ちよい〳〵着にしても可いんだよ、それから、この行李は平素着だのお繻絆類ばつかりだよ。』

母様は忙がしく荷物を爲さりながらも、あれこれと氣を揉んで、產れて初めて親の膝元を離れて、遠い學校の寄宿舍へ入つて行く芳子が、そばから誰も着物の世話なんぞしてくれる者がなくて、ひとりで間誤つかないやうに、いろ〳〵細いことまで注意を爲さいます。

『ねえ御覽なさいよ、羽二重だの、小紋縮緬だの、善いのは皆な別々に風呂敷に包んで、斯樣して綺麗にしてありますからねえ、取り出す時には、面倒でも一々、上から上から取り出して、決して下のを突然引き摺り出したりするんぢやありませんよ。』

『えゝ大丈夫よ。』

芳子は母樣とお顏を見合つて、莞爾笑ひました。

いつでも忙がしく簞笥の引出をあけて、いきなりぐゝいと引きぬくやうに着物を取り出して、他の着物を

[redacted]

皆な皺くちやにするのが芳子の癖なのでした。

『此處へねえ、水白粉の瓶を入れて置きますからねえ。』

母樣はローヤル白粉の大瓶を手携袋の中へお入れになりながら斯樣仰有いました。

『そんなものいりません、母樣、だつて女學校の寄宿舍なんぞでは、誰もおつけになる方ないでせうから。』

『なに、そんな事があるもんですか、幾ら女學校だつて、女と云ふものはねえ、身だしなみが大切ですから、おしやれをおしなさいと云ふんぢやないがね、餘りとり亂したなりをしないやうに、朝は手早く髪をあげて、手洗を使つたら薄らこれをお塗りなさい。』

『えゝ』

芳子は返事はしましたけれども、何だか女學生ともあらうものが、そんな白粉を塗つたりなんぞ、お洒落をするのは気恥かしいやうな氣がして、寄宿舍で皆なが自分を嘲笑つて居るのが目に見えるやうに思はれました。

『だけどもねえ芳ちやんや、母樣にはお前さんの白粉をお嫌ひの氣持ちはよく解つて居ます。勉強を一生懸命しやうと云ふ女學生の身分で居て、お洒落をするのはうしろめたいとお云ひのだらう、左樣ですとも、母樣だつて決してお洒落をすゝめるのではありません、たゞ身だしなみを忘れないやうにと教へた丈けなんだからねえ、今芳ちやんが思つておいでの通り、いつまでも女學生の本分を忘れないで居て下さい。』

『えゝ母樣よく解つて居ます、屹度人に笑はれないやうに、そしてよく勉強致します。』

『如何ぞねえ。』

二人はまたお顔を見合つて、につこり笑ひ交しました。

『荷物の方は母樣がよくしてあげますから、芳ちやんは暫く彼方で休んで居てはね何？めんま

り氣をつめて面倒臭いお荷物なんぞして、又あとから疲れると大變だから』

『大丈夫なんですけれど、そいぢや私、一寸と裏の方を散歩して來ますから。』

『あゝさうお爲なさい。』

裏門を出ますと外のうらゝかさと云つたらありません。そよそよと氣持ちの好い春風に、美しい髪を弄らせながら、たんぽぽの黄や、純白のすゞしろや、紅深い紫雲英の花なんぞに畔を彩つた麥や菜種の畠道を辿る面白さ！

芳子はいつともなく土橋を渡つて、とある丘の麓に憩うて居ました、此丘は芳子のためには搖籃と云つても可い程、芳子は幼い頃から、

いつでも此處へ來ては、よくいろ〳〵の事を思ひました。

女學校に入つて、優等で卒業して、やがては女子大學にも入り、立派なものになつて母樣に喜ばれたい——

一葉女史のやうに、晶子女史のやうに……と思ふと、何時か雜誌の口繪で見たことのある、若くて而して美しい女流記者の立姿がくつきりと眼の前に浮んで、樂しい空想がそれからそれへ湧き出すと、芳子は自分がその女流記者なのか、女流記者が自分なのか解らなくなつて、ただわな〳〵身うちが慄へて來るのが常でした。

『あゝもう今日つきり、暫くは見おさめなんだわ。』

と思ふと懷かしくて〳〵。もう日が暮れかゝつて、薄紫の空を烏の群は八釜しく鳴きつれて、どんもり繁つた鎭守樣の森を目掛けて飛んで行く、其鎭守の森の此方にきら〳〵と夕日に輝いた白壁の土藏の後に、一際高い二階家の見えるのが芳子の家で、丁度今夕飯の煙が立ち登つて居る。それをじつと見据ゑて、芳子は思はずはら〳〵と涙をこぼしました。

『まあ私は何が悲しいのだらう、本當に妙だわ私！』

自分でも解らない涙が、たゞ流れて〳〵、拭いても〳〵拭き足りません。

『姉さんてば——』

斯樣呼びながら駈けて來たのは弟です。

『姉さんたら酷い、僕散々探し廻つたんだよ本當に。』

喘ぎ〳〵やつと走つて來た弟は、いきなり芳子の膝にもたれて、不平らしくお鼻を鳴しながら、あどけない眼を無理と白くして睨むまねをするのです。

だが芳子はじつと其顏を見入つたまゝ、何も云ひません、ぼんやり考掛けやもしたものいやうに見入つて居ます。……お互に泣いたり笑つたり、拗ねたり、怒つたり十幾年間と云ふ永い年月を、同じ家、同じ親の膝下に起居して、たゞの一日とて顏を見合はないでは居なかつたものを、斯樣して顏を見るのも、ものを云ふのも、もう今日一日限りかと思ふと、堪らなく名殘りが惜しい。

あゝ嬉しい遊學、悲しい別れ。

『次郎ちやん。』

芳子はなつかしさの餘り、弟の肩に手をかけたが、しまひにはいきなり抱き寄せて弟の無邪氣な顏に、自分の涙の頰をすりつけてないた。—完—